
もう1つの意味・・・

セラ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう1つの意味・・・

【Nコード】

N0324B

【作者名】

セラ。

【あらすじ】

貴方は、もう一つの怪談を知っていますか・・・？知らない・・・
・彼のようになってしまいますよ・・・

プロローグ（前書き）

えっと・・・

実は、この小説ちょっと前に載せてたんですけど・・・連載途中で消してしましまして（苦笑）

でも、一応完結しましたんで一気に載せたいと思います。
良かったら見ていって下さい。
♪

ブログ

皆さんは、『怪談』に2つの種類があるという事を知っていますか？

そもそも、『怪談』というのは「怖い話」を指しているのですが・

実は、その話の内容によって大きく2つの種類に分ける事が出来るんです・・・

「実話と作り話？」

いえいえ。そういう物じゃありません。

確かにそういう風に分ける事も出来ますが、実際の所『怪談』というのは、そんな簡単な物じゃありません・・・

それでは、一体どういう物なのか？

本編に入る前に、『怪談』の種類を1つだけ教えておきましょう。
その1種類には「人から聞いた怖い話」や「実際に自分が体験した話」もちろん「作り話」も含まれます。

これらは、恐らく皆さんが普段話したり聞いたりしている『怪談』
(怖い話)の内容になると思います。

しかし・・・

上に書いた内容には当てはまらない・・・

もう一つの『怪談』という物が存在するんです・・・

第1章 キャンプ

季節は、夏。

真夏のような暑さではないが、ここ数日は気温が30度近い日々が続いている。

俺の名前は、小島祐一。

Y大学に通っている21歳の学生だ。

今、俺はある場所に向かって車を走らせている。

いや。

『ある場所に向かって』と言うのは間違っている・・・
どこに行くかなんて決まっていない・・・

それどころか、今俺がいる場所が何処なのかも分からない・・・

それに、車内には俺の他に20代後半ぐらいの女が乗っている・・・
しかし、俺はこの女の事を知らないし、話をした事も無い・・・だ
が、不思議と違和感は無かった・・・

これが『夢』だと分かっていたからだ。

夢の中でも自分の意識を保てるのを『明晰夢』とテレビが何かで言っていたが、俺にはそれが出来るらしい。

だから、これが夢だと理解出来ていた。

『・・・ねえ、貴方こんな話知ってる？』

今まで、黙っていた女が俺に話し掛けて来た・・・

『ここから2、3キロ先に行った所に足影村って村があるんだけど、そこで起こった事件・・・』

『・・・いや。知らないけど』

『そう・・・』

あれは、今から5年くらい前・・・』

そういうと女は5年前に起こったという事件を話し始めた・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ゆ・・・・・・・・う・・・・・・・・」

「おい、ゆうー!! いい加減起きろー!!」

「・・・・・・・・うつゝ・・・・・・・・?」

「おーきーろーーっ!!」

「うあーっ!! うるせえっ!! 朝っぱらから誰だよ!!」

「おつ。やっと起きたか」

俺が目を覚ますと、部屋の中には大学の友達の『工藤礼二』が立っていた。

「・・・・・・・・あゝ。まだ酒抜けてない・・・・・・・・って、お前どうやって家入ってきたんだよ?」

「お前のお袋さんに入れて貰った。それよりお前、昨日何時まで飲んでたんだよ?」

「・・・・・・・・朝の5時ぐらいまで飲んでた記憶はあるんだけど・・・・・・・・」

俺は、昨日高校の時の友人との飲み会で朝方まで酒を飲んでいた。

「おいおい・・・大丈夫かよ。今日も飲み会あるの分かってるか？」

「あれっ・・・今日そんな予定あったっけ・・・？」

「まだ寝ぼけてんのか？今日は、キャンプ場で飲み会の予定だぞ？」

「あゝ。そういえば、そんな事言ってたな」

「ああ。だから早く支度しろ。もうそろそろ出ないと待ち合わせの時間に遅れるぞ」

時計の針は3時を指していた。

待ち合わせの時間は4時。

俺達は直接キャンプ場に集まる事になっていた為、早めに家を出ないと待ち合わせの時間に間に合わなくなる。

俺は、急いでシャワーを浴び、キャンプに向かう為の準備を始めた。と言っても、テント等の道具はキャンプ場で全て借りれる為、準備する物は懐中電灯や虫除けスプレーだけだ。

結局、3時30分に家を出る事が出来たが、俺の家からキャンプ場まではどれだけ急いでも4、50分は掛かる為、他に来る友人に遅れると電話を入れ、車を発進させた。

俺達が、キャンプ場に着くと、もう他のメンバーは集まっていた。メンバーは俺を含めて6人。全員大学の友達だ。

俺は、みんなに遅刻の事を謝り、テント等の道具を借り山の中に入っていた。

この、キャンプ場はテントを張る場所が決まっているらしく、ちゃんと敷地が分かれていた。

俺達は、おそらく夜に騒ぐだろう。と言う事なるべく他のキャンブ客がいないような場所にテントを張る事にした。

テントを張り終わると、夜飯の準備（火起こしなど）を始める事にした。

「なあ、礼二。そういえば、飯の材料とかがってどうなってんの？」

俺は、朝？（正確には昼）起きてすぐにキャンプ場に向かった為、そういう事は一切知らないし準備をしてるはずもない。

「ん？ああ。他のメンバーが買ってきてくれてるから安心しろ。あ

と、今日はバーベキューやるからな」

「あ。そうなんだ？何か悪いな・・・俺だけ何もしてないし。」

「まあな。それじゃあ火起こしやるぞ。」

そういうと、俺と礼二はバーベキューをする為に木炭に火を点ける作業を始めた。

他の4人は野菜や肉などを切りに行っているようだ。

火起こしは、思った以上に上手くいかず・・・

1時間近く掛かってようやく炭に火を移す事が出来た。

それから俺達は、まだ明るい時間だったが各々缶ビールや缶チューハイをクーラーから取り出し、飲み始めていた。

それから、2時間ほど経つとバーベキューも終わり、みんなで談笑していたのだが・・・

ここでメンバーの1人がある事を言い出した・・・

「なあなあ♪やっぱり夏の夜って言ったら怪談だろ♪みんなで百物語やらないか♪」

「いやいや。ロウソク買って来てないだろ・・・?」

そんな俺のツツコミもむなしく・・・

「雰囲気♪雰囲気♪百物語の雰囲気が出れば良いから、ロウソク無しで怪談だけでも話そうぜ」

(・・・百物語の雰囲気出したいんだったら、ロウソクは絶対必要だろ・・・)

俺は、酔っ払いにこれ以上ツツコンでも無意味と思い渋々承諾する事にした・・・

他のメンバーは、というと・・・

「おっ!!面白そうじゃん!!」

「やるぜ」

などと言っていた・・・

(この中で、まだ正常なのって俺だけ・・・?)

俺は、昨日の酒が残っていた為、今日はあまり飲まずにいた。なので比較的酔いは回っていない。

（ってか、みんなこんなに酔っててちゃんと話出来んのかな・・・？）

そんな俺の心配もよそに、みんなはフラフラしながら椅子を動かし始めた。

席は、中心にバーベキューで使っていたコンロ（まだ火が残っていた為）があり、俺達はそれを囲むようにして、座っていた。

「おしっ、それじゃあ、俺から行くぞっ」

この百物語をやろうと、言い始めた張本人が最初に会談を話す事になった・・・

第2章 怪談・・・

しかし、俺の予想通り怪談とは程遠い物だった・・・

酒のせいで、舌が回らず・・・

何を言ってるのか分らないうえに、最後のオチの所で急に笑い出す・・・

（はぁ・・・さすがに、これはヒドいな・・・）

と、俺が呆れていると「怪談らしき物」が終わったのか、満足気な顔で俺達に感想を聞いてきた。

「なあなあ、どうだった？」

俺の話、怖かった？怖かった？」

「・・・・・・・・」

さすがにこれには、みんな黙っていた・・・

酔いが回ってても、一応冷静な判断は出来てるんだな。と感心すると・・・

「・・・ってか、マジ怖かったって！！その話ほんとにあった話！？」

(・・・感心した俺が馬鹿だったな・・・)

こんな感じで、百物語？は進んで行き・・・

俺が怪談を話す番になった。

(うーん・・・怪談か・・・)

俺は、こういうオカルト系の物があまり好きでは無い為、怪談話とかはあまり知らない。

そこで、仕方なく作り話をする事にしたのだが・・・

そんな簡単に出来る物でもなく・・・

少しの間、考えていると・・・今日、夢で見た女が言っていた話を思い出した。

思い出したとは言っても、実際には夢の途中で工藤に起こされた為、全部は分らない。

しかし、それでもある程度の設定や話の流れがあるだけでもマシか。と思い、俺は夢の中で聞いた話をする事にした。

「・・・今から、5年ぐらい前の話なんだけど・・・足影村
って所で、ある事件が起きたんだ・・・」

第3章 呪い・・・

そのある事件とは、当時15歳ぐらいの女の子が誘拐され、山の中で死体で発見された。
という物だった・・・

しかし、その女の子が発見された時は死後1週間以上経っていた為・・・

体は腐り、さらにカラスや山の野生動物に食い荒らされ・・・
人としての原型をとどめていなかったという・・・

その事件から、1年ほど経ったある日・・・

「なあ。こんな話知ってるか？」

村に住む20歳ぐらいの男が友人と話をしていた。

「1年ぐらい前に、山の中で殺された女の子がいただろ？」

「1年前？・・・俺、確か2、3年ぐらい前に上京してたから、ちよっと分かんないな・・・」

「あ、そっか。ま、とにかく1年前に村の山の中で女の子が殺されるって事件があったんだよ。」

でも、その犯人ってまだ捕まっていなくてさ……

で、何か最近その事件の事である噂が出て来たんだ。」

「噂？」

「ああ。何か、その事件の事を面白半分で話してた中学生4人が山の中で死体で発見されたらしくて……
その女の子の呪いじゃないのかって……」

「……偶然じゃないのか？」

「……それが、そうでも無いんだよ。
中学生が山で死んだって事件が広まって、呪いの噂が出始めた頃に、
どっかの馬鹿が根性試みたいな感じで、その話してたんだけど……」

そいつらも、山の中で死体で見つかったって……」

「マジか……？って、それなら今こうやって話してるのマジイんじゃないのか？」

「いや。大丈夫だろ。」

中学生達が話してた内容って、かなり脚色してたり、笑い話みたいな感じで話してたみたいだしな。」

「うん．．．それなら良いんだけど．．．」

1週間後．．．

山の中で2人の男性の死体が発見されたい．．．

その「女の子」の呪いは．．．
今でも解ける事無く続いている．．．

「これが、俺の怪談だ．．．」

「．．．な、なあ．．．それってヤバイんじゃないのか？
そんな怪談話してたら、俺達まで死んじゃうんじゃ．．．」

「．．．作り話だよ。」

「えっ！？作り話！？」

「ウソだろ？何か、かなり現実味があっただって言うか．．．話し方がリアルだったから．．．」

そんな会話を交わしていると・・・

ふいに、工藤が俺に話し掛けて来た。

「なあ・・・ゆう。お前この怪談ってさ・・・作り話って言ったけど・・・」

この話いつ作った話なんだ？」

「ん？今、即興で作った話だけど？」

「・・・それって、おかしくないか・・・？普通、即興で作った話とかだったら・・・途中で詰まるはずだろ・・・？」

どんなに、頭の中に話のイメージが出来ていても、ここまでスラスラと話せるのは、ありえないだろ・・・？」

「・・・そう言われれば・・・そうだ・・・な・・・」

そう言い掛けた所で、目の前が真っ暗になり・・・俺の意識はそこで途絶えた・・・

『・・・うう・・・あれっ・・・？ここは・・・？』

俺、確か・・・さっきまで怪談を話してたはず・・・『

さっきまで、キャンプ場にいたはずなのだが・・・

俺は、何故か車の中にいた・・・

隣には、夢の中に出て来た女がいる・・・

そこで、俺はこれが夢なんだと分かった。

だが色々と疑問が出て来る。

俺は、あの時眠く無かった・・・それに、あの時の急に意識が途絶えるような感覚は・・・？

そこで、隣の女が俺に話し掛けて来た。

『ねえ・・・貴方、「呪い」ってどういう物か・・・知ってる？』

『・・・ああ。怪談なんかで出て来る奴だろ・・・』

俺は、考え事を中断された事に苛立っていた為、少し口調が荒くなっていた・・・

『フフフ・・・そうね・・・あなた達はそういう風に思ってるかもしれないわね・・・』

『・・・？』

『まあ、良いわ・・・貴方もそのうち分かる時が来るから・・・』

『・・・それって、どういう・・・?』

そこで、また俺の意識が途絶えた・・・

第4章 恐怖・・・

「・・・ゆ・・・・・・・・」

「おい・・・ゆ・・・う・・・・・・・・」

「ゆう！！大丈夫か！？」

「うつ・・・・・・・・」

俺が目覚めると、工藤達が俺の周りに集まり心配そうな顔で俺の事を見ていた。

「うつ・・・あれっ・・・工藤？どうしたんだ？何かあったのか？」

「おいおい。何かあったじゃないだろ？」

お前が話の途中で急に椅子から倒れて、そのまま動かなくなっちまったんだから、みんな心配してたんだよ。」

「・・・あ、そういえば・・・何か、話してる途中で目の前が真っ暗になって・・・それから・・・」

「それから？」

「・・・何か、あったような気がするんだけど・・・思い出せない・・・」

「そつか。ま、でも今日はもう休んだ方が良さそうだな・・・ゆうも、こんな感じだし・・・」

「ああ・・・悪いな・・・」

それから俺達は、まだ火が残っていた木炭に水を掛け、火が消えたのを確認してから、テントの中に入り休む事にした・・・

「・・・・・・・・・・」

それから、1時間ほど経つと、みんな寝てしまっていたのだが・・・

俺は、色々な事を考えていた為、眠る事が出来なかった・・・

工藤が言っていた「即興で作った話だったら、ここまでスラスラ話せない」という事。

何故、俺は急に意識が飛んでしまったのか、という事。

それに、意識が無くなってた間に何かあったはずなのだが、それが全く思いだせないという事。

「はぁ・・・こんなんじゃ、眠れる訳ないよな・・・」

このまま考えていたら眠れない、と思った俺は気分転換に外に出る事にした。

テントの外に出ると、夏とは思えない程の冷気が体を指した・・・

(うう・・・寒っ・・・夜の山って、こんなに気温下がんのかな・・・)

そこで、俺はこの異変に気付かないといけなかったのかもしれない・・・

俺達は、さっきまでこの夜の山の中で怪談話をしていたという事を・・・

『その時は、こんな寒さを感じてはいなかったはず・・・』

俺は、この異変に気付く事もなく、懐中電灯を片手にキャンプ場の中を少し歩く事した。

このキャンプ場は、道の脇に等間隔で街灯が取り付けられていた為、懐中電灯は必要無かったのだが、俺は一応持って来ていた。

10分ほど歩いた所で俺は、テントに戻る事にしたのだが・・・

俺達のテントの近くまで来た所で、ある異変に気付いた・・・

それは・・・

このキャンプ場に「音」が全く無い、という事だ・・・

今は夜中の2時過ぎという事なので、他のキャンプ客は寝てるのか
もしないが・・・

虫の声、風の音が全く聞こえて来ないのだ・・・
まるで、俺だけがこの世界にいるかのように・・・

そんな違和感に俺が不安を覚えていると・・・

俺の目にある物が写りこんできた。俺達のテントの前に、女が立っ
ているのだ・・・

腕は、片方しか無く・・・

片足は足首から先が無い女が・・・片手に包丁を持って・・・
それに・・・女の胸の辺りからは、赤い液体が流れ続けていた・・・

俺は、その女から目を離す事が出来ず・・・
その場にずっと立ち尽くしていた・・・

俺の足は、自分の意思で動かす事も出来なくなるほど震えはじめ・・・

全身に、一気に冷たい汗が吹き出て来ていた・・・

この場から逃げなければ、と思うが俺の体は言う事を聞かない・・・

俺が、その場から動けずにいると・・・

その女が俺達のテントの中に、自身の足を引きずりながら、ゆっくりと入って行った・・・

それから、何秒・・・何分・・・何時間・・・一体、どれだけの時間が経ったのかも分からない俺の目に、再びあの女が写りこんできた・・・

ただ、さっきの女と違うのは・・・
手に持っている包丁から、赤い液体が滴り落ちている・・・という事だ。

相変わらず動く事も出来ず、まるで金縛りにあったかのように、その場に立ち尽くしている俺に女は気付くと・・・

ゆっくりとこっちに向かって近づいてきた・・・

心臓の脈打つ音が強く早くなっていく・・・

足の震えは、さらに大きくなりその場に立っている事すら困難にな
って来ている・・・

『・・・・・・・・ケ・・・・・・・・タ・・・・・・・・』

俺と、女の距離が近くなっていくにしたがって、その女が何かを喋
っていることに俺は気付いた。

『・・・・・・・・ヤ・・・・・・・・ト・・・・・・・・ミツ・・・・・・・・ケ・・・・・・・・』

『・・・・・・・・ヤット・・・・・・・・ミツケタ・・・・・・・・・・・・・・・・』

アンタ・・・・・・・・ダツタンダネ・・・・・・・・』

その言葉が聞ける程近づいてきていた女は、俺にその凶刃を振り下

ろした・・・

・ 鋭い痛みと共に、俺の胸の辺りが熱くなっていくのが感じられた・

次第に、痛みがなくなり・・・

薄れて行く意識の中で、誰かの声が聞こえてきた・・・

『フッフ・・・貴方も、怪談のもう1つの意味が分からなかったのね・・・』

まあ、分かった所でもう手遅れなんだけどね・・・フッフ・・・
『』

終章 もう1つの怪談・・・

さて、この物語ではゆうさんが「もう1つの怪談」に気付く事はありませんでしたね・・・

皆さんは、「もう1つの怪談」が何か分かりましたか・・・？

え？

分からない？

仕方ないですね。

それでは、私が教えましょう。

貴方が彼と同じ目に合わないように・・・

まず先に「もう1つの怪談」が何かを覚えておきます・・・

もう1つの怪談とは・・・

この世に強い怨嗟の思いを残している霊が話す・・・

『呪いの怪談』なんです・・・

まあ、これだけ聞いても意味が分からないと思います。
そこで、ゆうさんの事を例に上げて説明しましょう。

話は、少し前に戻りますが・・・

ゆうさんは即興で作った怪談話を、スラスラと話す事が出来ていましたね。

何故なんでしょう？

それは簡単な理由です。

その話を考えたのは・・・ゆうさんでは無いからです。

え？

と、思われるかもしれませんが、しかし、それが事実なんです。
では、一体誰が考えたのか・・・

いや。

考えたというのは間違っていますね・・・

何故なら、ゆうさんが話した怪談は夢の中に出て来た「女」が話した物なのです。

ここで、話はさらに物語の始めに戻りますが・・・

ゆうさんは、最初夢の中で出て来た女から「足影村での事件」を聞いていますね？

それを、工藤に起こされた為途中までしか聞いていないと、ゆうさんは思っていましたか・・・

本当にそうでしょうか？実際は、全て聞いていたんです。

しかし、ゆうさんは話の頭の部分しか覚えていなかった・・・だが、頭の中にはその話は記憶として残っていたのです・・・

自分自身では認識出来ないだけで・・・

そんな状態で、「足影村での事件」を自分で作って話そうとした所で、実際は記憶の奥に眠る話を、そのまま口にしてるだけなんです・・・

そう・・・ゆうさんが話していた怪談は・・・

夢の中で出て来た女が話した物なのです・・・

そして・・・夢の中に出て来た「女」とは一体何だったのでしょうか？

それは、私にも分かりません・・・

ただ分かるのは・・・

その女も「この世に強い怨嗟の思いを残している霊」という事だけです。

最後に、これだけ言っておきます・・・

『強い負の思いが込められた怪談話は・・・呪いを含む物語となるのです・・・』

今まで、説明したことを簡単に省略すると・・・

「ゆうさんは、夢の中で出て来た「霊」から聞いた呪いを含む怪談を話してしまった為、その身に呪いが降りかかってしまったのです・・・」

これで、貴方も「もう1つの怪談」がどういう物か分かりましたか？

『この世に強い怨嗟の思いを残している霊が話す・・・呪いの怪談』

貴方も、作り話をする時は十分に気をつけて下さい・・・。

今回の、ゆうさんのケースは稀な物なのです・・・
本来なら、私たちは夢の中で霊から話を聞いたとしても・・・
その事を理解出来ないのです・・・

貴方が、気付いていない内に「呪いの怪談」を頭の中に刷り込まれているかもしれませんよ・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0324b/>

もう1つの意味・・・

2010年10月11日11時32分発行